

前回に引き続き小田原地区の市民講座より、
ご利用者様とご家族様のエピソードをご紹介します。

「訪問看護 感動エピソード part4」

1・「次の世界で絶対に、
お会いしましょう・・・」

“神の手”と呼ばれた美容師さんでした。

まだ60歳代で、下半身の麻痺・・・腰の骨に転移でした。

歩行は困難と言われました。

それでも、何とか歩きたい

・・・ゆっくり、ゆっくり、リハビリをすすめ、つかまって、
やっと歩けるようになりました。

“これは奇跡だ！”と喜びました。

散歩と食べることが、何よりも楽しみ！ お手伝いして外に出ました。
神秘的な黄色に染まる、大いちょうの木の下では

“パワーもらった！”と、満面の笑顔。

腰から首の骨にも進行し、手足が不自由になりました。
それでも白内障の手術を希望。

“だって死ぬとき、
世話になったみんなの顔を見て、ありがとうと言って逝きたいから”



“もう一度外に出たい！”

看護師の介助で車椅子に乗りました。

スーパーで、あんぱん1個買って、介助で召し上がり・・・

“あなたも食べなさい！”

半分いただきました。

“なんか、秘密っぽくて、よけいに美味しいね！”



ピザやお寿司を取って、
お酒も少し飲みました、
死後の世界の話もして、
“もういいのよ・・・”と。

そのおだやかなまなざしに、
「そう・・・」としか答えられなかった。
わたしの心は泣いていました。

あの日のままの、静かで、きれいなきれいな旅立ちでした。
“うれしい、うれしい、しあわせ、しあわせ、ありがとう、ありがとう・・・”
そんな声が聴こえた気がしました。
本当にお疲れさまでした。



「 次の世界で絶対に、お会いしましょう・・・ 」

2・「相当練習しないと、
人に披露するには失礼だよね・・・」

“退院して頑張らないと・・・！”
と本気で思った。目標は、車椅子で外出すること。
“もう声が出なくなっちゃった。。。でも

相当練習しないと、
人に披露するには失礼だよね・・・”
と、真剣なまなざしで詩吟に気持ちを込めて吟じます。



<奥様記>

ずっと元気で全く症状もなく、趣味の詩吟を楽しんでいた。
食欲低下と足が痛くて、受診したら

「末期がんです。既に治療はない」と言われた。
本人も家族も、わけが分からない、途方に暮れた。

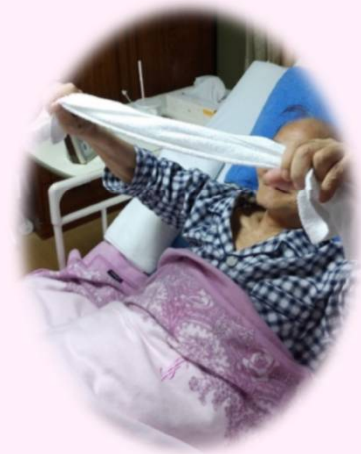
入院中は、話す事もせず、笑顔もない。
介護する自信があったわけではないが、帰りがっていたので自宅を選んだ。

入院中に、病院の看護師さん、訪問看護師さん、往診してくれる先生、
そしてケアマネジャーさんと話し合いがあり、顔なじみになった。

退院した日から、生活や私が介護に慣れるまで、看護師さんが毎日訪問してくれた。
尿カテーテル、麻薬、坐薬、血糖測定や緊急時の連絡など、だんだん不安が減った。
連絡すればいつでも来てもらえる訪問看護は、とても大きな安心感があり、ありがたい。

薬も、薬局さんが届けてセットまでしてくれる。変更や追加もその日に来てくれる。
薬の説明や相談にも乗ってくれて安心、素晴らしいサービスだ。

入院中は話そうとしなかった主人は、詩吟を吟じたり、私とたくさん話をして
動けなくても、手を伸ばして体操したり・・・
おだやかな毎日を愛おしそうに過ごしている。



3・「自宅にいる・・・ということ」

15年前に夫を看取ってから、ずっとひとり暮らしだった。もう90歳。
自分の事は自分でできたし、人の出入りも多かった。

リハビリの方が、捨ててある血の付いたティッシュを見つけてくれて受診した。
胃の通りが詰まり、もう何も出来ないとと言われて帰宅した。
娘である私の介護が始まった。

「自宅にいる・・・ということ」

外来の先生が、入院は勧めない、自宅を選ぶことを後押しして下さった
・・・今ではとても感謝している。

すぐに、往診の先生と訪問看護が入った。
飲み食い禁止だったので、看護師さんが毎日点滴に来てくれた。
介護の方法も教えてもらって、点滴の管理もできた。

先生は週に1回来てくれた。娘である私に

「仕事は続けた方がよいよ。あなたにはこれから先の方が長いんだから」

と言って下さり、それでもいいんだ・・・と、気持ちがすーっと楽になった。

入院や施設を選ばず、住み慣れた自分の家で暮らし、
“感謝、感謝！” “しあわせ、しあわせ！” “ありがとう、ありがとう！”
と口癖のように言ってほほ笑む母の、おだやかな顔を見ると、
在宅介護のすばらしさを感じた。

ただ、良いことばかりではない。
今後どうなってゆくのかという不安は重く、
弱ってゆく母の姿に押しつぶされそうになった。

しかし、看取りのパンフレットを見ながら、よく説明してもらい、理解と覚悟はできたつもりである。
そばにいない時に、息を引きとるかもしれない・・・けれど、それも含めて在宅なのだ・・・と、心から感じている。



4・「寿命の延長時間、
おまけしてもらってる」

抗がん剤治療していましたが、動けなくなり入院。強い薬がどんどん増えていく。
病院では、混乱して訳が判らなくなり、危険なため縛りつけられた。

ご主人の姿に耐えられなくなり、奥様は
「余命が1ヵ月ないならばうちで私が介護したい」と、希望される。
奥様は高齢で、手伝ってくれる人もいない。
大変だ、反対の声が多い中、退院。

退院してからも、

壁や天井に向かって話をして、手を空に伸ばして何かをつかもうとされる。

訪問看護は、昼間も夜も緊急で対応しながら、何回も工夫して奥様を支援した。
ゆっくり、ゆっくり、それでも確実に・・・だんだん落ち着いて、自分がもどる・・・
意識がはっきりして、食事や水分も上手に召し上がる・・・そう、そう、がんばれ、がんばれ・・・。

趣味である昆虫仲間の集まりに参加したいと目標を立て、起きて歩く練習が始まった。

「寿命の延長時間、おまけしてもらってる」



“今の生活ができるのは、あの時、自宅介護を決めてくれた妻と、
支えてくれるチームの皆様のおかげです。”

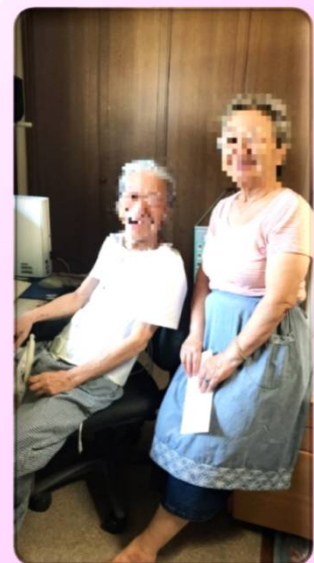
「寿命の延長時間を頑張ってもらいます、

本当にあの時、無理言って連れて帰ってきて良かった」

気が付くと、もうじき1年が過ぎてゆく・・・。

ずっと
叶うものなら、このまま永遠・・・、ふたりでずっと・・・。

奥様は、誰よりも力強い、自宅看護師さんです。



5・「自宅で最期を迎えることは
素晴らしい」

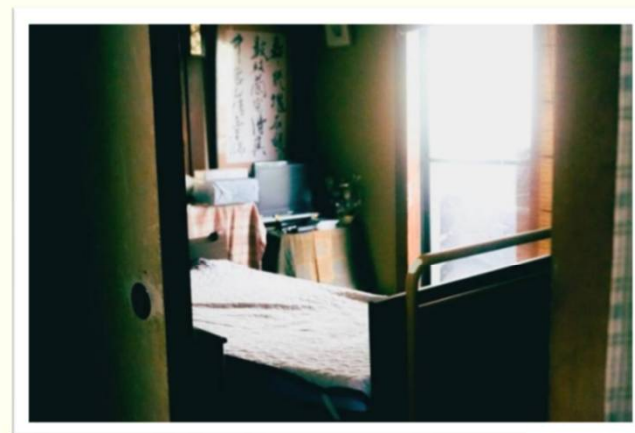


60歳後半で癌になり、全身に広がった。妻は50代で他界、やはり癌だった。
筋金入りの巨人大ファンで、タバコの煙がよく似合う。
 自分の意見をしっかり持って、思う通りにしかなされない、
強い強い男だった。

治療が打ち切られても“通院することに意味がある”と言って、
 娘さんが毎月、静岡まで自家用車で“親子でドライブ楽しめます”と、往復された。
 厳しい状況をすべて理解した娘さんには、
 さぞかし気が重いドライブだったことでしょう。
 訪問看護の受け入れも悪く“来てもらわなくていい”と、
 隔週に1回程度のお世話しかさせてもらえない。

だんだん具合が悪くなり、
 思うように飲食できない、痛い、苦しい。
 薬は変更され強くなる。
 訪問看護は、毎週になり、週2回になり。
 訪問回数が増えていく。
 いよいよ最期が近づくと、調子が変わる度に緊急
 で **“看護師を呼べ”**
 ……と、やっと頼ってくださった。

旅立ちの数時間前まで、家族に担がれてトイレに座る
 ……それが彼の希望だったから。
 意識レベルが落ちてゆく……眠るかのように眼を閉じて、
 そして呼吸が静かになった。



ご家族、訪問看護師、ケアマネジャーまで、かかわったすべての瞳が見守る中での永眠。
 こんなに多くの関係者が集まったところで、「只今臨終」は大したものだ。

< 娘さんより >

その日は初孫の誕生日，不思議。
母の命日も義息子の誕生日，これも不思議。

ずっと覚悟してきた“死”ですが，厳しいことは話さずに来たけれど，
思い返すと父は何となく解っていたと思います。
あえて口にせず，聞きもしない，父らしい。

すべて受け入れたうえで，
幕を自分で引いた・・・最後まで思う通りに・・・感動的な最期でした。



自宅で看取るという素晴らしい体験をさせてくれました。
素人で介護の経験もなく・・・，
それでも，サービスを使いながら家族も出来るんだ。
この体験を多くの人に知ってほしいです。

おわりに

私達はご利用者様、ご家族様の思いに、一緒に寄り添いながら支援させていただいております。

ご協力いただきました皆様に感謝申し上げます。

お知らせ

最後までお読みくださりありがとうございました。

ご意見、ご感想、今後取り上げてほしいテーマについては
《ホームページからのお問い合わせ》からお願いいたします。
※お問い合わせ内容には「小部屋」とお書きください。